

『米生産調整の経済分析』

荒幡克己 著

国際領域 主任研究官 木下 順子



『米生産調整の経済分析』

著者／荒幡克己
 出版年／2010年8月
 発行所／農林統計出版

食管法が廃止された1995年以来、ほぼずっと米政策の立案・運営の本拠で尽力してきた旧知の友人がいます。研究という私の悠長な仕事に対しても真っ直ぐな厳しい指摘をくれる得難い存在で、考えてみれば一度も誉めてくれていない率直な人なのですが、その口から先日めずらしく絶賛の高評価を聞いた本書をご紹介します。

本書は、日本の米政策の歴史と現状の分析、現政策の効果の検証、そして代替政策の提案も含むメッセージ性の高い快著です。全国的な現場取材の上に成された最近まれに見る骨太な政策研究として、学界でも格別の評価を得ているところですが、米政策を実施する側のプロから見てきわ立つ特長は、政策が実施されている末端の実態と乖離しない確かな現状認識とデータの選択、そしてモデル分析の意図のリアリティ（迫真性）だということです。こうした観点から専門書や研究論文を評価することは、学界の中だけではなかなか難しい場合があります。

本書が刊行された2010年は、農業者戸別所得補償制度が米へのモデル事業として始動した年です。したがって執筆時期は、今後の米政策を何らかの方向に転換する必要性をめぐって政治的気運がとりわけ高まっていた頃に重なると思われます。そのさなかの2009年4月、農水省は米政策変更の影響を分析した『米政策に関するシミュレーション（第1次）』を公表しましたが、その直前の時点で、これと目的を同じくする本書第5章の分析はほぼ完成形になっていました（荒幡克己「米生産調整廃止の影響に関する定量分析」岐阜大学食品経済学研究室ディスカッションペーパー、2009年）。

当時の本省分析チームと荒幡先生との連携関係はなかったようですが、両者がオーソドックスな手法を指向したこと、また、両者とも発想の土台が2002年の食糧庁の分析『米生産調整を実施しない場合の米価水準の算出』にあることから、分析モデルの形はかなり似たものとなっています。

両シミュレーションの結果に違いを生む主なポイントは、①水田への復帰面積（米増産量）の想定

と、②需要及び供給の価格弾力性の値です。本書では①②共にシナリオによって違う値を与えるパラメータであり、その違いが結果にどれほど

の幅をもたらすかが見えるようになっています。ちなみに、価格弾力性の値に応じて推定米価には最大4千円強の差が出ています。

一方、本省分析では、①はシナリオ別のパラメータですが、②は全シナリオに共通です。ただし、供給の価格弾力性は生産費調査から計測された経営規模別の値であるため、全経営に1つの弾力性値を用いた本書のどのシナリオと対照できるのか見定めるのは困難です。

なお、第5章の脚注に、本省シミュレーションへの筆者からのコメントがあります。引用すると、「農林水産省の分析は本章よりも精緻なモデルを用い、学術的な価値は本章よりも高いものと評価できる」。一方、本書の分析は「学術的厳密性ではある程度妥協しつつ、一方で実践的有用性については、現場との遊離が少なくように配慮」し、特に水田復帰面積の精確な推定に力が注がれています。これに対して実践面で本省分析が優れる点をあげるなら、「動学モデルを用いていることによって、初年目の混乱で起こる増産のオーバーシュート性を鮮やかに描き出すことに成功していることである」。

紙幅の関係で全編のご紹介はできませんが、実は本書への最初のレビューがすでに学会誌『フードシステム研究』（第18巻2号、2011年、評者＝小林弘明）から出ています。フードシステム学会ホームページで公開されていますので、この分野に最も明るい先生の確かな評をこちらでご参照ください。

本書の上にさらなる知見が積み重ね議論が拡大することを期待します。米が専門分野ではない私にとっても、「政策研究と言うならこれくらいのことをやれ」と一喝をくれる座右の書です。